［研究ノート］

「ルーマニア人の統合」再考
― 1866年クーデタを中心に[1] ―

志　田　恭　子

はじめに

ルーマニアに関する歴史記述は「ルーマニア史」ではなく「ルーマニア人の歴史」という民族史の体裁をとることが多い[2]。それには、オスマン帝国、ハプスブルク帝国、ロシア帝国の勢力下に長くおかれていたルーマニア人が国民国家としてのルーマニアを建てたのは19世紀半ば以降のことであること、そのルーマニアの領域に含まれたのはドナウ二公国であったモルドヴァ、ツァラ・ロムネアスカ（ワラキア）[3]、そしてオーストリア領だったトランシルヴァニアなどに限られ、特にロシア帝国領であったベッサラビアはその大部分がソ連邦のモルダヴィア・ソヴェト社会主義共和国となり、ソ連邦崩壊後1991年に独立しモルドヴァ共和国となったという複雑な歴史が影響している[4]。

ルーマニアの隣にある「もうひとつのルーマニア人国家」モルドヴァ共和国においても、優勢な歴史記述は「ルーマニア人の歴史」である。「ルーマニア人地域」であるドナウ二公国、トランシルヴァニア、ベッサラビア、ブコヴィナなどのルーマニア人が民族統合を目指し、これらすべての地域の統一は実現しなかったもののルーマニアとモルドヴァ共和国の独立を達成したというもので、モルドヴァ共和国のルーマニア人の歴史を「ルーマニ

1　本稿は国連大学秋野フェローシップの援助を受けたウクライナ（2002年4月～2003年3月）とモルドヴァ共和国（2003年6月～2004年5月）での現地調査に基づく。

2　N. Jorga, *Histoire des Roumains et de leur Civilisation* (Paris, 1920); R.W. Seton-Watson, *Histoire des Roumains de l'époque romaine à l'achèvement de l'unité* (Paris, 1937); Andrei Oțetea, ed., *Istoria poporului român* (Bucureşti, 1970); Georges Castellan, *A History of the Romanians* (New York: Columbia University Press, 1989); Vlad Georgescu, *The Romanians: A History* (Columbus: Ohio State University Press, 1991); *Драгнев Д., Драгнев Е., Мискевка В., Варта И., Шишкану И.* История румын: с древнейших времен до наших дней. Кишинэу, 2002; Vasile Vasilos, *Istoria Românilor* (Chişinău, 2003).

3　ロシア語の一次史料においては「ワラキア」、「ワラキア人」の語が使用され、日本においても「ワラキア」の名称が慣用となっているが、ここでは現地語読みで表記する。

4　現在のルーマニアはモルドヴァ、ムンテニア、オルテニア、トランシルヴァニア、バナト、クリシャナ、マラムレシュ、ドブロジャの8地域から構成される。「モルドヴァ」の呼称に関して整理すると、1861年にモルドヴァ公国がツァラ・ロムネアスカ公国と統合され、1866年憲法で国名が正式に「ルーマニア」になったのち「モルドヴァ」の名称は事実上地域名となる。1918年ロシア統治下のベッサラビアがルーマニアに併合されたのち、ソヴェト政権がドニエストル川左岸地域（当時ウクライナ・ソヴェト社会主義共和国領）、つまりベッサラビアの東に隣接した「モルダヴィア・ソヴェト社会主義自治共和国（1924-1940）」を設置し、1940年にソ連がベッサラビアを併合した際、トランスニストリア（沿ドニエストル地域）と合わせて「モルダヴィア・ソヴェト社会主義共和国」を建国した。それが1991年に「モルドヴァ共和国」として独立し現在に至る。つまり本家「モルドヴァ」公国がルーマニアとなったのち、この呼称はソ連においてロシア語の「モルダヴィア」として受け継がれ、ソ連崩壊後、ルーマニア語呼称の「モルドヴァ」となったという経緯である。なお本文中で単に「モルドヴァ」と表記する場合は現在のモルドヴァ共和国ではなくモルドヴァ公国（ここでは1812年以降なのでベッサラビアは含まれない）を指すものとする。

ア人地域」全体の歴史のなかに位置づけた内容となっている[5]。現在モルドヴァ共和国の歴史教科書は、現地の歴史研究者が執筆したルーマニア語の「ルーマニア人の歴史」である[6]。例えば、あるキシナウ出版の『ルーマニア人の歴史』の序文で執筆者たちはこう語っている。「まず左岸ドニエストル、そしてベッサラビアに共産主義体制がしかれたことでこの地域のルーマニア人を残りのルーマニア民族から分離しようという意図的な試みが行われた…1989 年ののち[7]民主体制が成立したことで歴史家たちは史料の利用と現代史学史研究の成果を踏まえた客観的な立場から民族の過去を叙述する可能性を手にした」、「モルドヴァ共和国における現在の民族文化と文明は、ルーマニア人が住む全領域において形成された数世紀にわたる歴史的伝統を基礎に発展してきた。何百年にわたって積み重ねられてきたこの歴史的財産は、今日モルドヴァ共和国やルーマニアのみならず、その圏外に暮らすすべてのルーマニア人にとっても唯一の共通の遺産となっている。したがって民族史はルーマニア史やモルドヴァ共和国史といった国史にまさる広がりと大きさをもつのである[8]」

しかし、かつてロシア帝国領でありソ連邦の一員であったモルドヴァ共和国においてはより複雑な史学状況がある。「ルーマニア人の歴史」に対抗する「モルドヴァ（共和国）史」の存在である。そこではモルドヴァ人はスラヴ系の影響を強く受けたことによって形成されたエトノスで、ルーマニア人とは異なる民族だと主張され、モルドヴァの歴史をロシアやソ連の歴史の一部としてとらえる認識を強く出した記述となっている。この歴史を支持する人々にとってはルーマニアで起こった出来事は外国史にすぎない。『モルドヴァ・ルーマニア語辞典』を執筆して物議をかもし[9]、ルーマニア人史家から「コミュニストたちのイデオローグ」と呼ばれるヴァシレ・スタティ[10]は、著書『モルドヴァ史』の序文でこう主張している。「この世界に自分たちの歴史を叙述し学ばない民族など存在しない。それなのにもう 10 年以上もモルドヴァ国家はこの神聖な法則の例外となっている。モルド

5　これらはルーマニア語で書かれることが多いが、二ヶ国語出版も珍しくない。

6　モルドヴァ共和国では 2003 年秋に起こった歴史教育論争が今なお続いている。事件の発端は、教育相ヴァレンティン・ベニュークが現在小・中学校で教えられている「ルーマニア人の歴史」と「世界史」の科目のかわりに、歴史教育の新カリキュラムとして「統合史（Istoria integrată）」なるものを導入する計画を打ち出したことだった。ベニュークと 6 人の歴史教師が作成した「統合史構想」によると、この新プログラムはすべての子供たちに等しく自分がモルドヴァ国民であるとの意識を植え付け、トランスニストリアなどの国内の分離主義を抑えて国家の連帯を強化することを目的としているとされる。さらにはこのプログラムに参加した教員には二倍の給料が支払われるという優遇措置があったとされ、約 50 校が新カリキュラムを実験導入したとされる。「ルーマニア人の歴史」教科書の執筆者やそれを支持する教員そしてルーマニア語の新聞・雑誌は、新カリキュラム導入計画は共産党政権と一部の左翼教師たちによる「ルーマニア人の歴史」廃止のための政治的陰謀にすぎないとして猛反対した。2004 年新学期から実験プログラムの導入を希望する中等学校はさらに増え、全国 1400 のうち 200 校を超したとされる。*Flux* (5 September, 21, 24 October, 14 November 2003, 12 March 2004); *Timpul* (19 September 2000); *Moldova Azi* (16 July 2004) http://www.azi.md/archive/2004/07/16/Ro; *Romanian Global News* (9 September 2004) http://www.rgnpress.ro/content/view/1505/

7　1989 年にラテン文字の「モルドヴァ語」が国家語になるなどルーマニア民族運動が活発化する。しかしこれは同時にガガウズ地域やトランスニストリアとの対立が深まるきっかけとなる。

8　*Драгнев и др.* История румын. С. 4-5.

9　『モルドヴァ・ルーマニア語辞典』はモルドヴァ共和国で話されているのはルーマニア語とは異なる言語であるモルドヴァ語だとする認識の下に編纂されたため、ルーマニア語教師や「ルーマニア人の歴史」研究者などから大きな反感を買った。

10　*Flux* (5 September 2003). スタティは「統合史」導入構想の参画者の一人とされる。

ヴァ共和国は、国民が他人の歴史を学んでいる地球上でただ一つの国である…モルドヴァでは他人の歴史であるルーマニア人の歴史を押し付けられているのである[11]」。このように民族史である「ルーマニア人の歴史」と国史である「モルドヴァ（共和国）史」とが対立状態にあるというのが現在のモルドヴァ共和国における史学動向といえる[12]。

民族史が国史記述としての地位を占める状況は、かつてロシア帝国領だった諸国やバルカン諸国においてはごく普通に見られる現象であるが[13]、民族史に共通の問題点として、同じ地域にいるマイノリティへの関心の低さがまず挙げられるだろう。「ルーマニア人地域」と呼ばれる諸地域には実は多くの少数民族が存在しているにもかかわらず、ルーマニア人の闘いだけを称揚するような姿勢に問題があることは論を待たない。実際、上述のキシナウ出版の『ルーマニア人の歴史』の序文ではこう述べられている。「私たちはルーマニア人の歴史をエトノスとしてのルーマニア人の歴史よりも広い意味合いで考えている…19-20 世紀のベッサラビアやドニエストル左岸においても、そしてモルダヴィア・ソヴェト社会主義共和国やモルドヴァ共和国においても、ルーマニア住民の隣にはウクライナ人、ロシア人、ガガウズ、ブルガリア人（1941 年まではドイツ人も）、ユダヤ人、ロマ、ポーランド人などの少数民族もまた暮らしていたし今も暮らしている。これら他民族との共存の歴史は私たちの民族史の一部を成しているのである」しかしマイノリティとの友好的関係だけを強調するのではなく、ルーマニア人が彼らに対して不寛容であった歴史事実の存在についても率直に認める必要があるだろう。たとえばモルドヴァ共和国の「ルーマニア人の歴史」のなかに帝政末期のベッサラビアで起こったユダヤ人ポグロムに関する記述を載せたものはほとんど見当たらない[14]。またルーマニア統治下のベッサラビアで起こった「ホティン暴動 (1919 年 1 月 19 日～ 2 月 1 日)」、「ベンデル暴動（1919 年 5 月 27 日）」そして「タタルブナル暴動（1924 年 9 月 16-22 日）」は「モルドヴァ（共和国）史」側では必ず詳細に記述される事件であるが、「ルーマニア人の歴史」においてはまず論じられることはない[15]。

---

11 *Статы В.* История Молдовы. Кишинев, 2003. С. 7, 10.

12 このほかに「ベッサラビア史」というジャンルがある。これは 1812 年にロシア帝国でベッサラビアが成立して以来の歴史を扱うもので、古代の記述はない。*Скурту И.* (ред.) История Бессарабии: от истоков до 1998 года, Издание 2-е, переработанное и дополненное. Кишинэу, 2001; Dinu Poştarencu, *O istorie a Basarabiei în date şi documente* (1812-1940) (Chişinău, 1998); Iulian Chifu, *Basarabia sub ocupaţie sovietică şi tentative contemporane de revenire sub tutela Moscovei* (Bucureşti, 2004).

13 たとえば旧オスマン帝国領のバルカン諸国における「民族復興理論」については、佐原徹哉『近代バルカン都市社会史：多元主義空間における宗教とエスニシティ』刀水書房、2003 年、1-13 頁。また中央アジアの例としては、宇山智彦「カザフ民族史再考：歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』第 2 巻第 1 号、1999 年、85-116 頁。

14 ユダヤ人ポグロムに関する記述がある教科書は Ion Varta, Igor Şarov, *Istoria Românilor, Epoca modernă (1850-1918): Manual pentru clasa a VIII-a* (Chişinău, 2003), p. 57.

15 1918 年にベッサラビアがルーマニアに併合されたのちもベッサラビア南部や北部のウクライナ人などの非ルーマニア人労働者や農民がルーマニア政権に対してストライキやパルチザン活動を行っていた。彼らはウクライナやロシアの共産党と連携しルーマニアの社会・共産主義者からの支持を受けており、ルーマニア政府は軍や警察によってそれらの動きを封じようとした。1919 年 1 月 19 日にベッサラビア北部のホティンを中心に武装蜂起が起こり、「ディレクトーリヤ（執政政府）」がルーマニアのベッサラビア併合を非合法とし農民の手に土地を戻し人民軍を創設することを宣言するが、ルーマニア軍によって鎮圧され千人以上の死者と数百人の逮捕者を出す。5 月 27 日にはベッサラビア南部のベンデルを中心に鉄道労働者が蜂起し駅などを占拠するがルーマニア軍によって百人以上射殺され、大勢の逮捕者を出す。

他方では、この「ルーマニア人の歴史」が民族の統合というテーマを強調するあまり、「大ルーマニア主義的な」歴史が量産されていることも同様に深刻な問題といえる。そこではルーマニア人が互いに対立し血を流し合った経験に触れることは避けられ、誰もが等しく統合を願っていたかのような偏ったルーマニア人像が描かれている。したがってここでは特に1866年クーデタを素材にしながら、この「民族統合」論が抱える問題について考えてみる。

この1866年のクーデタは、意図的か否かは不明であるが、現地の「ルーマニア人の歴史」がほとんど詳述することのない歴史的事件のひとつである。1859年にモルドヴァとツァラ・ロムネアスカで二重選出されて1862年に事実上の両公国の統一を果たしたアレクサンドル・ヨアン・クザを反体制派が廃位に追い込み、ホーエンツォレルン家のカールを招きカロル1世として擁立した[16]。あたかも「無血クーデタ」であったかのように描かれるこの政権交代劇は、実はモルドヴァとツァラ・ロムネアスカの間に深い亀裂を生じさせたばかりか、多くの人々が同胞の手によって命を落とした事件であった。

「ルーマニア人の歴史」がクーデタからカロル1世の即位までの3ヶ月間にルーマニアで何があったかということをまず論じないため、現地においてこの事件が史学論争の争点になっているわけではない。むしろこの事件が「ルーマニア人の歴史」において論じられないこと自体が問題だといえる。なぜなら「ルーマニア人の歴史」は非ルーマニア人の問題について言及しないだけではなく、「ルーマニア人の民族統合の歴史」にとって不都合な史実をも視野から除外しようとしているからである。

以下では、ルーマニア人の記憶から失われようとしているこの「空白の3ヶ月」を検証することで、「ルーマニア人の歴史」の問題点と課題とを明らかにすることを目指す。そして異なる歴史的背景を持つ地域から成るルーマニアと、立場を異にする人々から成るルーマニア人の姿を正しく理解するための作業の一環としたい。

ベッサラビア南部では労働者と農民が「南部革命委員会」を結成し1922年からタタルブナルがその拠点となる。この年ルーマニア共産党が結成されるが翌年フェルディナンド1世は中央集権的な憲法を公布、ブラティアヌ政権は1924年4月に共産党を非合法化する。これに対し、9月15-16日にタタルブナルを中心におよそ6千人が参加したとされる大蜂起が起こり「モルダヴィア・ソヴェト共和国」樹立が宣言されるが、ルーマニア軍9連隊によって22日には鎮圧され数百人の死者と逮捕者を出した。現在ウクライナ領のタタルブナルにはこの事件の大きな記念碑がある。*Статы*. История Молдовы. С. 347-348; *Тичина А.К.* (ред.) Українське Подунав'я. Ізмаїл, 1998. С. 22, 31; *Верстюк В.Ф., Дзюба О.М., Репринцев В.Ф.* Україна від найдавніших часів до сьогодення: Хронологічний довідник. Київ, 1995. С. 421; *Лебеденко О.М., Тичина А.К.* Українське Подунав'я: минуле та сучасне. Одеса, 2002. С. 135; *Царанов В.И.* (ред.) История Республики Молдова: С древнейших времен до наших дней (издание второе, переработанное и дополненное). Кишинев, 2002. С. 197-199.

16 アレクサンドル・ヨアン・クザ（1820-1873）はモルドヴァの貴族出身でプルート川に近いブルラドで生まれる。ヤシやパリで学び軍務を経験したのち1848年にはルーマニアで革命活動に参加。革命後はモルドヴァ公グリゴレ・アレクサンドル・ギカの庇護下でガラツィ市長などを務める。1859年にモルドヴァとツァラ・ロムネアスカの両方で君主に選出され、彼の統治下で次々と急進的な改革が断行された。国外亡命後はおもにウィーンとフィレンツェに住み、ドイツのハイデルベルクにおいて死去。ヤシに埋葬された。Petru D. Popescu, *Dicționar de personalități istorice* (Bucureşti, 2001), pp. 92-97. カロル1世（1839-1914）の在位は、1866-1881年がルーマニア公、1881-1914年はルーマニア王国の国王。ホーエンツォレルン・ジグマリンゲン家のカール・アントン公の二男でナポレオン3世の遠戚にあたる。ベルリン大学で歴史を学び、1864年のプロイセン・オーストリア対デンマークの戦争に参加。妻エリザベタとの間に一女。後継のフェルディナンド1世（在位1914-1927）も同様にホーエンツォレルン家出身でカロルの甥にあたる。P. Popescu, *Dicționar de personalități istorice*, pp. 77-82; Vasilos, *Istoria Românilor*, p. 232.

1. 先行研究と史料について

まず1866年のルーマニアで勃発したクーデタとそれに続く「内乱」について論じた先行研究について整理する。現地の「ルーマニア人の歴史」においてはクーデタに関する記述はあるが、クーデタ後の内部対立についてはまったく取り上げられないか、もしくは「モルドヴァの分離主義者の反対運動が軍に鎮圧された」という程度の記述しかない場合が多い。またこのクーデタそのものをテーマとした研究自体が多くない。外交問題に関する数多くの優れた研究を行ったモルドヴァの歴史家チェルタンは、主にロシア外交文書館に所蔵されている当時の外相やブクレシュティ（ブカレスト）の総領事の報告書や書簡などの史料を用いて、1866年クーデタを列強の対応や国際関係に位置づけて分析している[17]。また著名なバルカン史家ジェラヴィチは、やはり大ルーマニア主義的な民族統合へのステップを強調してそれに反する社会グループについてはほとんど言及されない研究動向を批判し、チェルタンと同様にルーマニア駐在の各国領事たちの文書を分析することで、モルドヴァの分離派とロシアとの密接な関係を強調した独特の視点からクーデタと内部対立を考察している[18]。

従来の研究では「リベラルと保守の対立[19]」、「統一派とモルドヴァの分離派の対立」という構図がよく見られるが、クザを廃位させた反体制グループは保守と急進リベラル、両公国出身者の連合であったことがよく知られているように、ルーマニアにおける統一派と分離派、リベラルと保守、そしてモルドヴァ人とツァラ・ロムネアスカ人の絡み合いははるかに複雑である。反統一派はモルドヴァだけではなくツァラ・ロムネアスカにも存在しており、統一派は全員がリベラルではなく保守が含まれていた。ここでは特に分離派と統一派の対立だけではなく、統一派内部の対立にも着目する。伝統的ともいえる統一派の対立はクーデタやその後の「内乱」を考える上で重要な意味を持っているのである。

そもそもこのクーデタを他から切り離して独立したテーマとして扱うこと自体に問題があるといえる。クザを含め、クザ時代の政府や臨時政府などで国政を担った政治家の多くは1848年に革命活動に身を投じた世代であり、それぞれが思い描いた祖国の未来は必ずしも同一ではなかった。そしてその違いこそがクーデタを引き起こした主要因だったのである。したがって以下では、1866年クーデタと「内乱」を少なくとも1848年革命からの文脈に位置づけて、統一派のさまざまな立場と主張を整理し、また当時の国際情勢や列強の思惑、農民蜂起をも視野に入れて検討する。

---

17 *Черман Е.Е.* Великие державы и государственный переворот 1866 г. в Румынии // Вопросы истории и историографии Юго-Восточной Европы. Кишинев, 1977. С. 17-65.

18 Barbara Jelavich, “Russia and Moldavian Separatism,” in Herausgegeben von Alexander Fischer, Günter Moltmann, Klaus Schwabe, *Rußland-Deutschland-Amerika: Festschrift für Fritz T. Epstein zum 80. geburtstag* (Wiesbaden, 1978), pp. 73-87.

19 1866年クーデタにいたるまでのリベラルと保守の対立について詳しいのはKeith Hitchins, *The Romanians, 1774-1866* (Oxford: Clarendon Press, 1996). ただしクーデタ勃発までの研究なのでその後の内部対立については論じられていない。

ここで利用する一次史料はロシア帝国側の報告書である[20]。ロシア帝国とモルドヴァの国境であるプルート川に面したベッサラビアの町スクリャン（スクレニ）の中央検疫局から、オデッサのノヴォロシア・ベッサラビア総督とキシニョフ（キシナウ）のベッサラビア県知事に宛てた報告書が、当時の状況を知る重要な手がかりとなる[21]。このスクリャンはベッサラビア併合以前にはモルドヴァ公国のヤシ県（Ţinutul Iaşi）に属していた町でヤシに地理的に近く、モルドヴァから最新の情報を入手するのに有利な位置にあった。現地の総領事が中央政府に宛てた報告書とは性質は異なるが、チェルタンやジェラヴィチの研究に欠けているクーデタ直後の人々の反応、クリミア戦争後ロシア帝国から併合されたイズマイルなどベッサラビア南部地域の状況、首都ブクレシュティの混乱、臨時政府内の分裂、カロル１世の即位時の状況に関する情報を提供している[22]。

なお以下では、まず1866年クーデタについて考察し、つづいてクーデタにいたるまでの経緯を概観し、そののちクーデタから３ヵ月後のカロル１世即位の描写に戻るという順序で進む。それによって、クーデタが1848年革命以前からドナウ二公国が抱えてきたさまざまな問題を根源としたものであることを明らかにする。

2. クーデタとヤシ事件

クーデタは1866年２月11日早朝のブクレシュティで起こった[23]。軍隊がクザの居城を包囲し、ニコラエ・ゴレスク将軍率いる閣僚や貴族や聖職者を含む反体制グループが、阻止されることもなくクザの部屋に押し入った。クザは救援を呼ぶことも抵抗することもできずにその場で退位宣言証書への署名を強要され、その後ただちに居城から修道院に厳重に護送され三日後にはオーストリアへ国外退去することとなった。こうして、保守派でモルドヴァ出身のラスカル・カタルジウ、急進リベラルでツァラ・ロムネアスカ出身のニコラエ・ゴレスク、軍の代表としてのニコラエ・ハララムビエ陸軍大佐の三頭君主代理[24]を中心とする臨時政府が発足したのである。臨時政府の首相にはイオン・ギカ、内務大臣にはディミトリエ・. ギカ、財務大臣にはP. マヴロゲニ、軍務大臣にはD. レッカ少佐、そして教育相にはコンスタンティン・A・ロセッティが任じられた[25]。

20　Державний архів Одеської області (ДАОО, ウクライナ･オデッサ州国立文書館、オデッサ), ф. 1 [Канцелярія Новоросійського і Бессарабського генерал-губернатра], ф. 5 [Управління Тимчасового одеського генерал-губернатора]; Arhiva Naţională a Republicii Moldova (ANRM, モルドヴァ共和国国立文書館、キシナウ), Fond 2 [Канцелярия Бессарабского губернатора], Fond 65 [Бессарабская губернская земская управа], Fond 88 [Бессарабское дворянское депутатское собрание].

21　ロシア帝国南部国境地域を統治したノヴォロシア・ベッサラビア総督府（1823-1874年）は、エカテリノスラフ県、ヘルソン県、タヴリーダ県、ベッサラビア州（1873年から県）から構成された。1866年当時のノヴォロシア・ベッサラビア総督はП.А. コツェブエ伯、ベッサラビア県知事はП.А. アントノヴィチ、スクリャン中央検疫局の局長はA. バラス、ガラツィ領事はA. ロマネンコ。在ブクレシュティ・ロシア総領事はГ.Г. オッフェンベルク、在ヤシ・ロシア領事はИ. レクス。*Чертан Е.Е.* Русско-румынские отношения в 1859-1863 годах. Кишинев, 1968. С. 32-36; *Чертан*. Великие державы. С. 20-22.

22　ルーマニアでの現地調査を行っていないためここではルーマニア側の一次史料は用いていない。

23　ここでは旧暦の日付を用いる。12日を足すと新暦の日付となる（1901年以降は13日を足す）。

24　ロコテネンツァ・ドムネアスカもしくはカイマカニアと呼ばれた制度。

25　Vasilos, *Istoria Românilor*, p. 224; Seton-Watson, *Histoire des Roumains*, p. 375.

臨時政府はフランスのナポレオン 3 世の支援を受け、クザの代わりにベルギー国王の兄弟フランドル伯をフィリップ 1 世としてルーマニアに迎える意思を表明した。軍はいちはやく新公に対する忠誠を宣誓した[26]。一般住民の反応について 2 月 14 日付のスクリャンからの報告書はこう記している。「住民の大多数は、首都においても地方においても、新公への宣誓を完全に拒絶しています…現在二公国においては全般的な社会動揺が広がっています。中産階級は臨時政府に対して激しく怒り、不服従を表明しています…下層の人々は現在のところ落ち着いていて、自分の国で起こっている全てのことを無関心に眺めています…[27]」

他方、歓喜にわくモルドヴァの状況についても報告されている。ヤシでは祝賀パレードが開かれ、県庁舎からクザの肖像画が除去され、なかにはそれを踏みにじる者もいた[28]。またクザの追随者として旧官僚が拘束される事件も起こった。ヤシのオーストリア領事ハースはヤシではクザの退位は歓迎されているが、フィリップの即位については熱狂を欠いていると報告している[29]。またモルドヴァ南部のガラツィやブライラでも同様に祝賀の祈祷式やパレードが行われた。

イズマイルを中心とするベッサラビア南部地域は、1856 年のクリミア戦争後のパリ講和条約によってロシア帝国からモルドヴァ公国に併合されていたが、この併合地における状況もまた報告されている。イズマイル領事によれば、クーデタの知らせを受けたルーマニア人住民が不審と落胆に陥ったのに対し、ロシア人住民はロシア人を嫌ったクザの廃位を歓迎したとされる。またこの併合地に、秘密指令によって全権委任の臨時特使としてアレクサンドル・マヴロコルダトという人物を任命するという内容の電報が、内務大臣からイズマイルの県知事に届いた[30]。わずか 1 万デシャチナ（約 1 万平方キロ）で住民は 12 万人にすぎないこの併合地に内務省直属の特使を任命するという特別措置からは、モルドヴァとロシアの国境地帯に位置し、海に面していないドナウ二公国がようやく手にした黒海への小回廊であるこの地が再び分離するような事態を臨時政府が警戒していることを示している[31]。イズマイルでの祝賀の祈祷式やパレードには各国の領事が招待されたが、彼らは何らかの理由をつけて断り誰一人参加しなかった。役人たちはかつてクザに忠実だった者たちも含めて躊躇することなく臨時政府と新しい君主に忠誠を誓ったが、神学校

26 ДАОО, ф. 1, оп. 174, спр. 8, арк. 5.

27 しかし一般住民が最も恐れていた事態はオスマン軍の侵攻であった。報告書は、住民の多くが外国の調停なしには連合公国に平和と秩序は訪れないと感じ、オスマン軍に先んじてロシア軍が介入してくることを望んでいると伝えている。ДАОО, ф. 1, оп. 174, спр. 8, арк. 3-4.

28 ДАОО, ф. 1, оп. 174, спр. 8, арк. 5-5зв.

29 *Чертан*. Великие державы. p. 79.

30 ANRM, Fond 2, inv.1, dosar 7877, fila 3verso.

31 この併合地には主にブルガリア人、ガガウズ、古儀式派などのコロニー住民が多かった。露土戦争後のベルリン条約（1878 年）で再びロシアに併合されたが、ルーマニア統治下で導入されたコンミューン制などの行政システムは維持され、ゼムストヴォは導入されなかった。ДАОО, ф. 1, оп. 215, спр. 39, арк. 149-154зв; ДАОО, ф. 5, оп. 1, спр. 943, арк. 42зв-47; ДАОО, ф. 5, оп. 1, спр. 184; ДАОО, ф. 5, оп. 1, спр. 970; ANRM, Fond 65, inv. 1, dosar 1673, fila 1-38verso; *Скурту*. История Бессарабии. С. 49-51; *Будак И.Г.* Буржуазные реформы 60-70-х годов XIX века в Бессарабии. Кишинев, 1961. С. 194-209; *Федоров Г.К.* Государственно-административное устройство и местное право Бессарабии (1812-1917 гг.). Кишинев, 1974. С. 37-38, 63-66; *Адлер И.Г.* Свод постановлений Измаильского уездного земского совета от 1879-1901 г. Измаил, 1902.

の教授と学校の教員たちは宣誓を拒否したとされる[32]。

ところがナポレオン3世の説得にもかかわらず、フランドル伯はルーマニア君主に即位することを固辞した。これをきっかけに、ルーマニアの統一に反対する分離派が勢力を強め、統一派との対立が顕著となってくる。統一派は外国人君主のもとでの統一ルーマニアの保全を目指した。彼らは再び地元出身の君主を立てることでモルドヴァとツァラ・ロムネアスカの争いが繰り返されることを恐れたが、同時にもし外国からの招致に失敗するとしても統一だけは何とか維持したかった[33]。これに対して分離派のモルドヴァ貴族は、モルドヴァとツァラ・ロムネアスカがそれぞれの君主と議会を持つとした1858年パリ会議決定（後述）への回帰を望んだのである。彼らは、もし外国人君主を擁立することが不可能な場合にはツァラ・ロムネアスカから分離して自分たちの統治者を立てることを主張した[34]。またこの分離運動にはモルドヴァの著名な作家ゲオルゲ･アサキ（1788-1869）やイオン･クレアンガ（1837-1889）などが参加･支持していたとされる。臨時政府は、モルドヴァの分離派が独自の機関紙を持ち広範な住民層からの支持を得ているほどの勢力であることをよく認識していた。カタルジウは3月はじめにブクレシュティのフランス総領事ティロッスと会談した際、「モルドヴァの分離への動きが極めて強いため、もし外国人君主との擁立に失敗して自分たちの中から君主を任命するような事態になれば、臨時政府は統一を維持できないだろう」と率直に語ったとされる。この事態を収拾するために、臨時政府はモルドヴァの諸都市や郡の県知事たちを罷免してツァラ・ロムネアスカの役人と入れ替えた。ヤシでは県知事にニコラエ・ゴレスクの兄弟シュテファンが任命され、さらにイズマイルと同様に臨時政府の特使が送り込まれた。モルドヴァ軍はツァラ・ロムネアスカに召喚され、替わりにツァラ・ロムネアスカ軍がモルドヴァに配置された[35]。他方、首都ブクレシュティでは民衆の暴動が続いていた。3月半ばには前首相のミハイル・コガルニチャヌが路上で群集に襲われ、半死半生になるまで殴打されたとされる[36]。

モルドヴァでは数々の集会が開かれた。ヤシのオーストリア領事ハースが議長をつとめた集会にはロシア軍の大佐グリゴレ･カンタクズィノ、ロシア外相ゴルチャコフの従兄弟、ロシア領事館勤務の役人たち、親ロシアのモルドヴァ人たちが出席して1858年パリ会議の決定を支持した。またツァラ・ロムネアスカから来たシュテファン・ゴレスク市長と軍の指揮官I. コルネスクを解任する陰謀についての噂が流れた。このような状況が伝わって、ブクレシュティからゴレスク将軍とカタルジウが分離派の説得に訪れた。三頭君主代理のうちの二人が直接ヤシを訪れたという事実から、ブクレシュティの臨時政府がモルドヴァの反統一運動の高まりをいかに深刻に受け止めていたかがわかる。この代表たちは数回にわたる集会において外国人君主を擁立しての統一を呼びかけたが、モルドヴァの人々は、クザが統一君主になった1859年からこれまでの7年間でモルドヴァは苦境に陥った

32　ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7877, fila 3-7.

33　ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7877, fila 7-8verso.

34　*Гросул В.Я., Чертан Е.Е.* Россия и формирование румынского независимого государства. Москва, 1969. С. 148; *Виноградов В.Н.* (отв. ред.) История Румынии: 1848-1917. Москва, 1971. С. 196; *Чертан*. Великие державы. С. 31, 57.

35　ДАОО, ф. 1, оп. 174, спр. 8, арк. 10-10зв.; *Чертан*. Великие державы. С. 57-58.

36　ДАОО, ф. 1, оп. 174, спр. 8, арк. 10зв.-11.

として統一に反対し、さらに国債へのモルドヴァ人の参加を求める臨時政府に対してその汚職と悪政を激しく攻撃したため、ブクレシュティからの代表は退場を余儀なくされたほどだった。他方、臨時政府はイオン・C・ブラティアヌをプロイセンに派遣し、ホーエンツォレルン家のカールをルーマニアの君主に招くための交渉を進めていた。ナポレオン3世とビスマルクの支持を受けたカールはこの申し出を承諾したため、4月2-8日にはカロル1世統治下での統一の是非を問う国民投票を実施するとの決定が通達されたが、モルドヴァ側はロシアとの関係が深いとされる若い貴族ニコラエ・ロセッティ・ロズノヴァヌを筆頭とする選挙委員会を結成し、自分たちの未来は自分たちで決めるとして国民投票の拒否とモルドヴァ議会の召集を宣言した[37]。

そして4月3日の日曜日、ついにモルドヴァ分離派とツァラ・ロムネアスカ軍との間で流血の事件が起こった。午前11時にヤシの教会で礼拝が終了したのち、集まったおよそ2千人の民衆が府主教カリニク・ミクレスクを先頭に、臨時政府の二人に会って自分たちの願いを表明するためにデモ行進を開始した。その途上で軍隊が彼らに発砲し、兵たちはサーベルで府主教の手から十字架を叩き落し槍で彼を負傷させた。デモ参加者と兵たちは殴り合い・撃ち合いとなり、3時間に及ぶ乱闘のすえ双方合わせて数百人の死傷者がでたとされる。このデモに参加していたロズノヴァヌの義理の兄弟でベッサラビア在住のコンスタンティン・モルズィ公も同様にサーベルで殴打されて負傷し、ヤシからベッサラビアに逃げ戻った[38]。

この衝突は、同時に集会が開かれていたロズノヴァヌの邸宅の前で起こったとされ、同日の声明書でヤシの県知事であるシュテファン・ゴレスクは「この暴動にヤシ市民は関与していない。関与したのは500人ほどの外国人流浪者とユダヤ人とロズノヴァヌ邸の使用人たちで、彼らはモルドヴァの分離派に買収されていた」と言明した。ゴレスクはヤシのロシア領事レクスの関与やベッサラビアから来たモルズィ公がこの暴動の中心人物だと指摘し、臨時政府はモルドヴァの分離を望むロシアがモルドヴァ人を扇動して騒ぎを起こさせたと非難したが、ロシア領事たちはそれに反論した。またフランス領事は、このデモ行進に参加した群衆には、近郊の農民、下町の労働者、下層民のほかに外国人、ブルガリア人、ロマ、リポヴァン派（ドナウ河口地域に多い古儀式派）が多かったと報告しており、統一ルーマニアに反対した人々の中にはモルドヴァ人の分離派のみならずマイノリティの存在があったことを示唆している[39]。

このヤシ事件後も住民による小規模なデモは散発的に続いた。ヤシ市民のツァラ・ロムネアスカ軍に対する怒りは静まらず、夜間歩哨に立つツァラ・ロムネアスカ兵が頻繁に死体となって発見されるようになり、「モルドヴァの同胞」に向けて、「自由なモルドヴァ」を称揚し「火と剣をもって人々の願いを妨害した」臨時政府に対する抵抗を呼びかけるビ

37 Jelavich, “Russia and Moldavian Separatism,” pp. 80-82.

38 スクリャンからのヤシ事件に関する報告は、このモルズィ公がスクリャンに立ち寄った際に語った内容である。ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7877, fila 17-18; *Гросул, Чертан*. Россия и формирование. С. 147-149; *Виноградов*. История Румынии. С. 196; *Чертан*. Великие державы. С. 58-59, 114; *Лебедев Н.И.* (отв. ред.) Очерки политической истории Румынии (1859-1944). Кишинев, 1985. С. 34; *Istoria României în date* (Chişinău, 1991), p. 215; Jelavich, “Russia and Moldavian Separatism,” pp. 82-83.

39 Jelavich, “Russia and Moldavian Separatism,” pp. 82-84.

ラが行き渡った[40]。

さらに4月から5月にかけて南部国境地帯を中心に大規模な農民蜂起が発生した。これはモルドヴァ出身の保守派で三頭君主代理の一人ラスカル・カタルジウによって3月18日に制定された「農業契約法」が原因であった。この法令は領主や大土地所有者の利益を保護し、クザの改革によって自由になったはずの農民を債務奴隷に至らしめる内容であったとされ、クザとコガルニチャヌの土地改革に反対であったカタルジウは、クーデタの実行からわずか一ヶ月でこの法令を制定し1864年の「農業法」を覆したのだった。農民たちはこの「農業契約法」に反発し、与えられたばかりの土地を奪われることを恐れてクザの復位を要求した。また国境地域の農民は国境警備を兼ねることによって税と徴兵の義務を免除されるという特殊なカテゴリーに属していたが、クーデタ後オスマン帝国軍の進攻を恐れた臨時政府が彼らに国境の特別警備を強要しようとしたことへの反発も一因とされる。蜂起は住民の支持を得ながら南部国境地帯のほぼ全域に拡大し、特にツァラ・ロムネアスカの西南部地域において激しかったとされる[41]。

しかし4月2-8日に実施された国民投票では圧倒的多数でカールの即位が支持された。5月2日には憲法制定議会の採決が行われ、その結果を受けて5月8日、イオン・ブラティアヌに伴われたカールがルーマニアに到着したのだった[42]。

クザ政権を打倒したニコラエとシュテファンのゴレスク兄弟、ロセッティ、イオン・ギカ、ブラティアヌなどの反体制グループも路上で襲われたコガルニチャヌも、そしてクザ自身もまた、かつての最も傑出した1848年革命活動家にしてルーマニア統一をもとめて闘った同志であった。1848年革命の挫折以来、彼らはどのような経緯でモルドヴァとツァラ・ロムネアスカを統一に導き、そして敵味方に分かれてクーデタへと至ったのであろうか。

3. クザの二重選出まで

「ルーマニア人の歴史」においては、1859年にクザがモルドヴァとツァラ・ロムネアスカにおいて二重選出されたことを、ルーマニア人が自らの意志で民族統合への道を選んだ歴史的事件としてとらえ、クザに「統一公」の異名を冠している。しかし同時にこの二重選出は、統一派と分離派の対立のみならず統一派同士の対立を象徴する事件でもあった。以下ではまず、クザが連合公国の君主となるまでの統一派と分離派の対立について考察してみる。

40　ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7877, fila 29, 31-31verso. ただしスクリャンからの報告書からは、ヤシ事件によって引き起こされたブクレシュティへの反感がモルドヴァの広範囲にわたるのかヤシに限られるのか判断できない。

41　*Istoria României în date,* pp. 214-215; *Виноградов*. История Румынии. С. 198-199. クザの改革と農業契約法については以下を参照。木戸蓊『世界現代史24 バルカン現代史』山川出版社、1977年、99-100頁; Emil Cernea, Emil Molcuţ, *Istoria statului şi dreptului românesc* (Bucureşti, 2001), pp. 199-208, 224-225; Costică Voicu, Ion T. Amuza, Bogdan Stanciu, *Istoria statului şi dreptului românesc* (Bucureşti, 2001), pp. 272-279, 299-300.

42　国民投票の結果は賛成685,965票、反対224票、棄権124,837票。憲法制定議会の票決では賛成が106票、棄権が9票だったとされる。Ion Varta, Demir Dragnev, *Istoria Românilor, Epoca modernă: Manual pentru clasa a XI-a* (Chişinău, 2002), p. 140; Vasilos, *Istoria Românilor*, p. 225.

クーデタ発生からちょうど10年前の1856年2月、クリミア戦争終結後のパリ講和会議の席上でドナウ二公国問題が提議された。これは1848年革命後に国外に亡命したルーマニア人活動家たちの英仏などへの働きかけが大きく関与していた。列強は、外国人君主下でのモルドヴァとツァラ・ロムネアスカの統一について賛否を問い、フランス、プロイセン、ロシア、サルディニアは賛成、オスマン帝国とオーストリアは断固反対した。イギリスは当初賛成の意を表明したが、のちに反対に回る。最終的に列強は、両公国がそれぞれ特別議会を設置してこの問題について取り組むべきとの結論に至った[43]。

統一派のグリゴレ・アレクサンドル・ギカを君主とし、強力な論客にして最も指導的な活動家であるミハイル・コガルニチャヌを擁するモルドヴァでは、公然と統一運動が行われた。コガルニチャヌはすでに1855年末から新聞『ドナウの星』を発行し、二公国の統一や領主地農民の解放を呼びかけていた[44]。6月にはヤシで「統一協会」が結成され、翌1857年初めにはリベラルや保守を含む「統一委員会」が設立される。アレクサンドル・ディミトリエ・ギカ統治下のツァラ・ロムネアスカでは3月3日にブクレシュティで集会が開かれ、900人の統一支持者が自治の要求と外国人君主下の統一の支持を表明した。また1848年革命ののち亡命していたロセッティ、ニコラエ・ゴレスク、イオン・C・ブラティアヌなどの中心的な活動家が続々と帰国した。両公国統一への気運は高まり、この年9月にモルドヴァの特別議会（Divanurile ad-hoc）は外国人君主統治下におけるルーマニアとしての統一をほぼ満場一致で決議、ツァラ・ロムネアスカの特別議会もまた満場一致でこの決定を支持した[45]。

しかし分離派もまた、この決定に至るまでの過程を静観していたわけではなかった。モルドヴァの首都ヤシにとって、統一は首都の地位からルーマニア第二の都市への転落を意味した。1859年の時点でブクレシュティの人口は121,734人、ヤシは65,745人と圧倒的な差があり[46]、モルドヴァとツァラ・ロムネアスカが同じ土俵で競いあうことになればモルドヴァ側に勝ち目はなかった。事実、1862年にブクレシュティを新首都とする連合公国の成立後にヤシの商工業は衰退することとなる。二公国の統一はモルドヴァのツァラ・ロムネアスカへの事実上の従属を招くことは誰の目にも明らかだった。さらにこれまでヤシで権勢を振るってきたモルドヴァ貴族たちは、統一後に君主を取り巻くツァラ・ロム

43　1832年には英仏露が、地方勢力間の抗争が激しいギリシアにバイエルンのヴィッテルスバッハ家オットー（オトン）を君主に招いて独立国家とした先例がある。佐原徹哉「ナショナリズムの勃興と独立国家の形成」柴宜弘編『新版世界各国史18バルカン史』第4章、山川出版社、1998年、165-166頁。

44　バルシュ時代に『ドナウの星』は廃刊され、1856年末からブリュッセルにおいてフランス語で発行された。Vasile Maciu, “Organizarea mişcarii pentru unire în anii 1855-1857 în Moldova şi Ţara Romînească,” *Studii: revistă de istorie* 12:1 (1959), pp. 61-62.

45　モルドヴァ特別議会が統一を目指して掲げた5項目は①公国の自治②ルーマニアの国名での二公国の統一③外国人世襲君主の擁立④領土の中立⑤「民族のあらゆる利益」の代表たる国民議会の立法権掌握であった。領主や貴族議員の反対が強かったため、コガルニチャヌたちが目標としてきた領主地農民の解放や土地の分与は盛り込まれず、特別議会に参加していた農民出身の議員の要求もまたこの5項目には反映されなかった。*Виноградов В.Н.* Россия и объединение Румынских княжеств. Москва, 1961. С. 134-137, 178.

46　1859年の連合公国の人口（ベッサラビア南部併合地を含む）は4,425,000人。Nicolae Chicuş, Eugenia Danu, Demir Dragnev, Ion Negrei, *Istoria Românilor, Epoca modernă, partea a II-a (1850-1918): Manual pentru clasa a VIII-a* (Chişinău, 2003), p. 13.

ネアスカ貴族の輪からはじき出され、政治への影響力を失うことになる事態を怖れた[47]。1856年6月でモルドヴァ公のグリゴレ・アレクサンドル・ギカが退陣すると、反統一派である総督代理テオドル（トデリツァ）・バルシュとニコラエ・ヴォゴリデが後任として続いた。彼らは二公国の統一を望まないイギリス、オーストリア、オスマン帝国に接近し賄賂を渡して支援を求め、7月の特別議会の選挙を不正に行うなど露骨な妨害工作を展開した[48]。しかしそれでも、統一に反対したのは大貴族、商人層、裕福な都市民という一部の人々に過ぎず、広範な大衆の支持を得るにはいたらなかった。

他方ツァラ・ロムネアスカの反統一派は、表向きには統一を支持するふりを装っていた。統一に異を唱えることは同胞に対する裏切りを意味するため、あえて言い出せなかったのである。しかし内心では統一によってモルドヴァ貴族に自分たちの地位を脅かされることを危惧していた。概して特権階級はモルドヴァにおいてもツァラ・ロムネアスカにおいても現状維持を望んでいたといえる。ブクレシュティでは二つの分離派グループが形成されたが、それでも露骨な反統一運動を行うことはなかった。一つはかつてのツァラ・ロムネアスカ公であったゲオルゲ・ビベスクとバルブ・シュティルベイの兄弟を支持するグループで、もう一つは現職の総督代理であるアレクサンドル・ディミトリエ・ギカを中心とするグループであった。彼らは統一も外国人君主も気に入らなかった。そしてもし統一ということになれば自分が君主の座に就こうと三人がそれぞれ対抗意識を燃やしていたのであった[49]。

ところが、モルドヴァとツァラ・ロムネアスカの特別議会がルーマニアとしての統一を決議したにもかかわらず、翌1858年のパリ会議において列強は、二公国はそれぞれ地元出身の君主とそれぞれの議会を有するものと決定したのであった。これはモルドヴァとツァラ・ロムネアスカの大衆を失意に陥れる。このパリ会議ののちモルドヴァとツァラ・ロムネアスカのそれぞれに三頭君主代理が任命され、君主選挙の準備が開始されることとなった[50]。

1859年1月3日にモルドヴァで君主候補の選出が協議された。統一派候補のなかにはコガルニチャヌやラスカル・カタルジウが含まれていた。しかし意見は分かれ、決着がつかないまま協議は行き詰まってしまう。そこで候補の練り直しが行われ、誰かがクザの名を挙げ、彼が多数決で統一派候補に選ばれた。そして5日の選挙でクザは圧倒的多数でモルドヴァ公として選出された。ヤシは統一派君主の誕生を熱狂的に歓迎した。人々は「単一不可分の連合公国万歳」と歓呼し、統一のためにブクレシュティにおいても彼を選出することを望む声が噴き上がった。ツァラ・ロムネアスカの総督代理は三人とも保守派であ

47　*Виноградов*. Россия и объединение. C. 103-105.

48　当時モルドヴァ南部のガラツィのプルカラブ（県知事）であったアレクサンドル・クザはヴォゴリデの選挙妨害に抗議して辞任し、注目を集めた。この不正選挙は列強のオスマン帝国への圧力によって取り消され、再度実施された選挙では統一派が圧倒的多数を占めた。*Виноградов*. История Румынии. C. 118; P. Popescu, *Dicționar de personalități istorice*, p. 93; アンドレイ・オツェテァ編、鈴木四郎・鈴木学共訳『ルーマニア史2』恒文社、1977年、76-77頁。

49　*Виноградов*. Россия и объединение. C. 180-182.

50　モルドヴァ総督代理はヴァシレ・ストゥルザ、アナスタシェ・パヌ、シュテファン・カタルジウでツァラ・ロムネアスカ総督代理はヨアン・マヌ、エマノイル・バリャヌ、ヨアン・フィリペスク。モルドヴァの総督代理の一人シュテファン・カタルジウは君主の座を狙ったために職を追われる。残り二人は統一派。*Виноградов*. Россия и объединение. C. 243-247.

り統一派候補の選出を何としても阻止しようとしたが、統一を要求して暴徒化した民衆が議会の建物を占拠し保守派議員を脅迫するなどしてブクレシュティは混乱に陥る。24 日、統一派がやむなく自分たちの候補を取り下げてモルドヴァのクザを候補に立て、おびえきった保守派も含めて全員がクザに投票した。統一を望んだ両公国の人々はクザの二重選出の知らせを受けて歓喜に沸き返った(51)。

こうしてクザはモルドヴァとツァラ・ロムネアスカの同一君主となった。モルドヴァにおいてさえ突如浮上したクザがツァラ・ロムネアスカにおいてまで君主に選ばれたという予想外の事態に、ブクレシュティの保守派は茫然としていた。誰とも知れぬモルドヴァ人にツァラ・ロムネアスカの運命を委ねることはできないと主張した者もいたが、もはや誰一人としてこの流れに逆らうことはできなかった(52)。オスマン帝国に自分の在位期間のみ両公国の統一を認めさせたクザは、1861 年末から 1862 年初めにかけて二公国の連合を宣言しブクレシュティを統一ルーマニアの首都に定め、そして 1863 年にコガルニチャヌを首相に任命する。これはモルドヴァ出身の二人が数多くの改革を断行したクザーコガルニチャヌ体制の開幕であった。

このクザの二重選出の顛末を振り返って、民衆も含めて統一を望んだルーマニア人がクザの同一君主としての即位を実現させたことは統一派の分離派に対する勝利であるように思われる。しかし実は「統一公」クザの登場は統一派の分裂がもたらした結果であった。統一を願う人々の意見の不一致はすでにクザの二重選出に影響を及ぼしており、統一が果たされたのちその立場の違いがさらに鮮明になっていく。続いて以下では統一派内部の対立について考察してみる。

4. 統一派の分裂

上述のように「ルーマニア人の歴史」においては、クザが両公国の君主として即位したという事実が、あたかもパリ会議における列強の決定をルーマニア人が出し抜くかたちで統一を実現させた、民族の連帯の勝利であるかのように解釈されることが多い。しかしなぜ予定外候補であったクザが統一ルーマニアの君主となったのかと考えるとき、事情はより複雑であることに気づく。モルドヴァにおいてクザが担ぎ出されたのは、まさに統一派が分裂していたからこそであった。統一派からの候補を立てる段階においてすでに統一派内部では意見が対立しており、「二公国の統一」という綱領だけが彼らの唯一の接点だったのである(53)。

モルドヴァ統一派において本来の有力君主候補であったコガルニチャヌとラスカル・カタルジウは、土地改革の問題で対立していた。当時、特に 1851 年から 1859 年にかけて農民蜂起が頻発していた(54)。さらには 1855 年 12 月にモルドヴァで、1856 年 2 月にツァラ・

51 *Виноградов*. Россия и объединение. С. 252-266; Barbara Jelavich, *Russia and the Rumanian National Cause: 1858-1859* (Bloomington, Indiana: Indiana University Publications, 1959), pp. 49-54.

52 *Виноградов*. Россия и объединение. С. 265; *Молдован П.П.* Молдоване в истории. Кишинев, 1994. С. 96-97.

53 *Виноградов*. История Румынии. С. 118.

54 1859 年 1 月のブクレシュティにおける君主選挙の混乱にあわせて、1857 年ツァラ・ロムネアスカの特別議会の農民議員だったミルチャ・マラエル率いる近郊の農民たちがブクレシュティ入りした。彼らは

ロムネアスカで農奴状態にあったロマの解放が宣言されたが、領主による脅しや土地の高額な賃貸料などで苦しむロマたちが大量移住するなどの問題が起こっていた。コガルニチャヌは領主地農民の自由農民化と買い戻し金の支払いを伴う土地の分配の実現を1848年革命以前からの目標としており、他方、保守派カタルジウは領主にとって不利な改革に反対し、「土地なし」での農民の解放を主張した。またやはり候補の一人であったコスタケ・ネグリ[55]は農民への土地の無償分与を主張していた。つまり、反統一派との対立以前に統一派内部での分裂が選出協議を紛糾させ、苦肉の策としてクザが蚊帳の外から連れて来られたのである。クザは1848年革命における指導的な活動家の一人であったが、当時陸軍大佐として軍の指導部におり、土地改革の具体的な綱領など持ち合わせていなかった。クザの選出は分裂した統一派が意見の一致に至るための妥協点であり、彼が人々の統一への希求を体現した人物であったというのはその意味においてだった。ツァラ・ロムネアスカにおいてはクザの選出は統一を望む民衆によって押し切られた形となったが、統一派と反統一派のいずれもが広範に支持された候補を有していなかったことはモルドヴァと同様であった。

そしてこの内部抗争は、クザ政権そしてクーデタ後の臨時政府へと受け継がれた。急進自由派ロセッティは1848年革命後に国外に亡命し、1851年にパリでブラティアヌなどと共同で雑誌『ルーマニア共和国』を発行し（1853年ブリュッセルで第二号を出版）、ルーマニア人による独立共和国の創設を目指していた。ブクレシュティにおいてロセッティはクザの即位を歓迎したが、議会制を望む彼らはしだいに君主の権限を強化するクザから離れ、保守派に接近していく。ロセッティが1857年に発行した新聞『ルーマニア人（Românul）』はクザ統治下で発禁となり、彼自身も二度投獄される[56]。他方、最初の首相であった保守派指導者バルブ・カタルジウはコガルニチャヌの土地改革に反対していたが、1862年5月に何者かによって暗殺される。保守派のラスカル・カタルジウ、急進自由派イオン・ブラティアヌ、穏健自由派イオン・ギカなどは1864年に議会の反対を押し切って「農業法」を成立させたクザに反発を強める[57]。こうして1863年リベラルと保守の両方が手を結んだ「奇怪な連合（monstruoasa coaliție）」が成立する。この連合こそが3年後クーデタを実行することとなる反体制グループであった[58]。1859年にクザの二重選出

軍と衝突し多くの逮捕者が出たが、同時に兵と農民たちが統一コールをしながら共にブクレシュティ入りしたのが目撃されている。議事堂になだれ込んだ群衆には農民も混じっていた。またクザが二公国の統一を宣言した直後の1862年1月にやはりマラエルがブクレシュティ近郊の村から1万人の農民を率いて首都に突入し、土地の分配と全身分制選挙権を要求したが、この蜂起は軍によってただちに鎮圧された。Gh. Platon, “Frămîntări țărănești în Moldova în preajma unirii,” *Studii: revistă de istorie* 12:1 (1959), pp. 107-139; *Istoria României în date*, pp. 196, 206; *Виноградов*. Россия и объединение. С. 262, 304.

55 ネグリはクザの土地改革の協力者であった。またクザがオスマン帝国に二公国の統一を承認させたときに在イスタンブル使節として後押しした。*Гросул, Чертан*. Россия и формирование. С. 107-108; *Роллера М*. (ред.) История Румынии. Москва, 1950. С. 321, 327.

56 *Роллера*. История Румынии, p. 338; *Виноградов*. История Румынии. С. 130, 138; *Istoria României în date*, p. 193.

57 この「農業法」は領主の妨害などによって短期間に十分な成果をあげることはなかったが、511,896家族に200万ヘクタール以上の耕地が分配されたとされる。*Драгнев и др*. История румын. С. 172.

58 オツェテァ『ルーマニア史2』、89頁；*Роллера*. История Румынии. С. 327, 335; Hitchins, *The Romanians*, pp. 304-305, 316.

を実現させたのは統一派だった。そして 1866 年クーデタを実行しクザ政権を打倒したのも統一派だったのである。

したがって、クーデタ後に彼らが組閣した臨時政府はその成立からして分裂の危機をはらんでいたといえる。ヤシ事件以前の 3 月には、ハララムビエ陸軍大佐、軍務大臣のレッカ少佐、ロセッティを筆頭とする「革命党」が臨時政府内で勢力を握った[59]。ヤシでの惨事の報が首都に届くと、ブクレシュティに残っていたハララムビエ大佐はゴレスクとカタルジウをもはや同志と認めないとする命令を発した。二人はすぐにヤシを発ったが、ブクレシュティに到着する前にある町の税関で拘束されたとされる[60]。これはモルドヴァ分離派に対する武力制圧が臨時政府の一致した決断ではなかったこと、ヤシ事件によって三頭君主代理の結束にひびが入ったことを示している。

さらに臨時政府の急進派までが内部分裂を起こす。スクリャンの検疫局長バラスによれば、ヤシ事件ののち首都でツァラ・ロムネアスカ軍とモルドヴァ軍の衝突が勃発した。4 月 11-12 日の二日間にわたって戦闘が続き、ブクレシュティ市民も参加して兵器庫を焼き払うなどしたとされ、この衝突による死傷者は 3 千人に達したと報告されている。バラスの報告では、ハララムビエとレッカはともに統一ルーマニア君主の座を狙っており、事件の発端はハララムビエの支持者とレッカの支持者との間に起こった小競り合いであり、ハララムビエがロセッティと共謀して「ルーマニア共和国」の樹立を宣言しようとしたかのような噂があったとされる[61]。おそらく首都におけるこの衝突は、分離派が統一派に制圧されたヤシ事件とは異なり、臨時政府の内部分裂によって引き起こされブクレシュティ市民を巻き込んで拡大したものと思われる。この衝突が事実であれば、数日前の 2-8 日に実施された国民投票によってカールがルーマニア君主として即位することが圧倒的多数で可決されたばかりであるにもかかわらず、首都ブクレシュティが実際には非常に不安定な状態にあったことを示す手がかりとなるだろう。

したがって 1866 年クーデタからカロルの即位までの政争をブクレシュティの臨時政府とモルドヴァの分離派との対立とみなすことは適切でないといえる。臨時政府がモルドヴァの反統一運動を武力制圧したヤシ事件は、モルドヴァとの関係のみならず三頭君主代理間の関係をも悪化させ、臨時政府の分裂を強めることとなった。国民投票後にすら臨時政府のメンバーが自らルーマニアの君主になろうとしているとの噂がとび、ヤシに劣らずブクレシュティの政情も揺れていた。かつて二公国の統一を共通の目的とした統一派においても、彼らがめざした統一のかたちはさまざまであり、その違いが分離派との対立に劣らず根深い確執を生み出したのである。

---

59 ДАОО, ф. 1, оп. 174, спр. 8, арк. 11.

60 ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7877, fila 29, 31-31verso. 報告書では彼らが “задержаны”（阻止された、拘束された）としている。おそらく一時的な拘束と思われるが（ラスカル・カタルジウはカロル 1 世下で首相を務める）、この報告書からは詳細は不明。

61 ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7877, fila 30-30verso. このブクレシュティにおける衝突やその背景についてはこの報告書に記されているだけで、より詳しい状況は不明。

5. カロル 1 世の即位

カロルの即位はクーデタからおよそ 3 ヵ月後の 5 月 10 日にブクレシュティで行われた。その前にまず即位に至るまでの列強の対応について追ってみる。

1856 年のパリ講和会議以来ルーマニアの保護国を任じていた列強は、独断的に改革を実現させていくクザ政権に対し不満を抱いていた[62]。クザの諸改革のうち、特に 1863 年 12 月の外国修道院領の国有化が、ロシアなどのキリスト教諸国やギリシャ人聖職者の強い反感を買った[63]。ルーマニアとベッサラビアには 15 世紀以来ギリシャのアトス山やイェルサレムの聖墳墓教会などに帰属する修道院が多くあり、ルーマニアでは全領土の 4 分の 1 を外国修道院領が占めていたのである[64]。さらには、セルビアの M. オブレノヴィチと外交官を交換するなど関係を強化していたことが、オスマン帝国のみならずオーストリアやイギリスの反発を招いた[65]。列強は次第にクザに対する包囲網を形成し、孤立を深めていったクザは 1865 年 12 月に議会に対していつでも外国人の王子に君主の座を譲って退位する用意があるという意思を表明していた[66]。したがって列強にとってクーデタとクザの廃位は予想された事態であった。

クーデタの勃発後、オーストリアを共通の敵とするフランスとイタリアは、統一ルーマニアをオーストリアに譲渡する引き換えにオーストリア下のヴェネチアをイタリアに併合する案をもちかけたが、ロシア、プロイセン、オーストリア、オスマン帝国の反対にあって断念する[67]。オスマン帝国、オーストリア、ロシアは統一ルーマニアを再び二公国に分離させようとしたが、フランスとプロイセンはカールを擁立しようとする臨時政府を支援した[68]。ロシアとオスマン帝国は、ルーマニアの君主を外国から招くことは「ドナウ

---

62 領事裁判権など国内の外国人の特権を廃止する法律の制定には特にオーストリアとイギリスが反発した。*Сторожук В.П.* К вопросу о внешней политике румынских объединенных княжеств в 1859-1866 гг. // Ученые записки КГУ (Кишиневский Государственный Университет). Т. 73. 1964. С. 43-57.

63 *Нарочницкая Л.И.* Россия и войны Пруссии в 60-х годах XIX в. за объединение Германии «сверху». Москва, 1960. С. 27-28; Hitchins, *The Romanians*, p. 313; コンスタンティン・C・ジュレスク著、中村一夫訳『ルーマニア統一国家完成への道』恒文社、1978 年、159-160 頁。

64 Elena Ţurcanu, "Contextul extern al problemei mănăstirilor româneşti închinate Locurilor Sfinte (1856-1863)," autoreferat al tezei de doctor în ştiinţe istorice (Universitatea Pedagogocă de Stat "Ion Creangă," Facultatea de Istorie şi Etnopedagogie, Chişinău, 2003), p. 19. ロシア帝国下のベッサラビアでは 20 万デシャチナ以上 (全領土の 4-5 %) を占めていた。ベッサラビアで外国修道院領の国有化に関する法令が出たのは 1873 年と 1876 年。これによって外国修道院側の取り分は 5 分の 2 に減らされた。この問題に関しては以下を参照。ANRM, Fond 88, inv. 1, dosar 2193, fila 22-44verso; ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 5832; ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 6371; Ion Nistor, Istoria Basarabiei (Bucureşti, 1991), pp. 245-247; *Берг Л.С.* Бессарабия: страна-люди-хозяйство. Кишинев, 1993; Jelavich, *Russia and the Rumanian National Cause*, pp. 103-120, 131-134; T. Varta, "Ţarismul şi hestiunea domeniilor mănăstirilor din Basarabia (1812-1917)," *Destin Românesc* 1 (1997), pp. 14-31.

65 *Чертан*. Великие державы. С. 103. またクザが人気を落とした原因の一つとして、カタルジウ家出身でセルビア王家に嫁いだマリエ・オブレノヴィチとのスキャンダルがあった。Seton-Watson, *Histoire des Roumains*, p. 349.

66 *Чертан*. Великие державы. С. 90.

67 *Чертан*. Великие державы. С. 22-30.

68 当時プロイセンとオーストリアが一触即発の危機にあり、列強の注意はそちらに集中していたとされる。またオーストリアは、統一ルーマニアの成立がトランシルヴァニアのルーマニア人の民族意識を刺

二公国の君主は地元出身者から選出する」と定めた1858年パリ会議の決定に反するとして抗議したが、イギリスの外相クラレンドンは「自堕落なモルドヴァ人やワラキア人から君主を選ぶよりは立派な外国人を君主に招いたほうが、よりよい統治をするだろう」と主張した[69]。オスマン帝国はルーマニアとの国境であるドナウ沿岸に5万の兵を配置したが、列強の支持を得られなかったため軍事介入は実行に移されなかった[70]。こうして外国勢力の妨害を受けることなくカールのルーマニア入りが果たされたのだった。

他方、ヤシ事件から数週間が過ぎてもヤシ市民のツァラ・ロムネアスカに対する不信と怒りは続き、街では「モルドヴァの愛国者たちへ」という呼びかけから始まる宣伝ビラが撒かれた。そこには「ブクレシュティで革命が起こり、ワラキア人が互いに戦っている。ハララムビエは自分が君主だと宣言した」、「プロイセンのカールはヤシでの事件を知って、カインのような兄弟殺しのルーマニア人の君主になることはできないと言明した」との情報が記されている。そして「単一にしてワラキア人のくびきから解放された、そして何百年ものあいだ自由であったモルドヴァ万歳」という言葉で締めくくられており、ツァラ・ロムネアスカと合併する以前のモルドヴァ公国時代への回帰の願望が表れている[71]。これに対しヤシ県知事は、ブクレシュティはまったく平穏だしカールはそのような言明などしていないと公式に反論し、このような流言をばらまく陰謀家や出版者たちを法に照らして厳罰に処すと通告した[72]。

しかし5月8日、カールがツァラ・ロムネアスカ最西端の町トゥルヌ・セヴェリンに到着し、第二の祖国のために尽くす意思を明らかにしたとの知らせがブクレシュティから届き、その夜ヤシの街はイルミネーションで飾られた。続いて11日にはヤシ事件の際に逮捕された府主教ミクレスクやロズノヴァヌを含む全員の釈放を命じる電信が首都から届く。釈放された府主教のもとに駆けつけた人々は「モルドヴァ万歳」と歓声を上げながら馬車から府主教を担ぎ降ろした。またおよそ1万人の群集がロズノヴァヌの拘留所からの帰途に同行しながら、「モルドヴァ万歳、統一反対、外国人の王子など要らない」と連呼した[73]。

この日同時に、前日に行われたカロル1世の即位式の様子を伝える電報が首都から届いていた。それによれば、カロル1世は聖書と十字架に手を載せて宣誓を行い、誓約書に署名した。彼は演説で「国民の総意によってルーマニア人の君主に選ばれた私は、自らの運命を私にゆだねたこの人々の呼びかけに答えるため、ためらうことなく祖国と我が家とに別れを告げた。この神聖な地に足を踏み入れたときから私はルーマニア人となった。幸福

激することを恐れた。*Гросул, Чертан.* Россия и формирование. С. 149; *Чертан*. Великие державы. С. 58-59.

69 *Чертан*. Великие державы. С. 37.

70 ルーマニアは4万の兵と1万人の義勇兵部隊を対峙させた。10月にスルタンはカロル1世をルーマニア君主として認める。Chicuş et al., *Istoria Românilor*, p. 19.

71 ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7877, fila 40-40verso. 宣伝ビラはルーマニア語で書かれているが、ここではスクリャンからベッサラビア知事への報告書にあるロシア語訳を参照している。

72 ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7877, fila 41. ブクレシュティでは4月22日に初めてのオーケストラ演奏会が催された。曲目はベートーヴェン、モーツァルト、ハイドンの作品だった。*Istoria României în date*, p. 215; Alexandru Popescu, *Istoria relațiilor culturale româno-germane* (București, 1998), p. 20.

73 ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7877, fila 48; ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7862, fila 1.

の日々も不幸の日々もあなたたちと共に分け合おう」と述べ、たとえ前途に困難が待ち受けていても最後まで誠実な統治を行うと約束した。そして周囲から沸き起こる「カロル1世万歳、単一不可分のルーマニア万歳」という熱狂的な歓声のなかを、議員たちに伴われながら宮廷に戻っていった[74]。

こうして外国人君主による統一が達成された。7月1日に公布された新憲法には「ルーマニア（ルーマニア語ではロムニア）」を正式な国名とすることが明記されている[75]。この国名による統一は、かつてクザの二重選出以前にコガルニチャヌらが起草し特別議会が掲げた5項目の要求のひとつであり、1858年のパリ会議において斥けられたものであった[76]。今後ルーマニアはオスマン帝国からの完全独立というさらなる目標を掲げて進み、露土戦争後の1878年、ベルリン条約によってそれは実現されることとなる[77]。

おわりに

以上の考察から、ルーマニアの「民族統合」において決定的な役割を果たしてきたのは、統一派の団結ではなく分裂であったことがわかる。1866年クーデタの発生は統一派が1848年革命以前から抱き続けていた国家理念の相違を起源としていた。1859年の「統一公」クザの誕生は、分離派に対する統一派の勝利というよりむしろ統一派の内部対立を背景としていた。そして1866年にクザを退位させたのも分離派ではなく統一派の中から生まれた反体制グループであった。さらにクーデタ後に統一ルーマニアの君主としてカールを迎えようとしていた臨時政府の結束すら不安定であった。

しかし同時に統一派と分離派の亀裂の深さについても明らかになったといえる。ルーマニアの統一と独立の実現を共通の目的とした人々は、二公国間の境界や政治的立場の違いをも越えて手を結び合った。そしてその目的達成のためには、統一を望まない同胞を圧殺

74　ANRM, Fond 2, inv. 1, dosar 7862, fila 2-3verso. ブクレシュティ市民およそ3万人がカロルを盛大に迎えたとされる。Varta, Dragnev, *Istoria Românilor*, p. 141. 各国領事は招待を受けたが誰も即位式に出席しなかった。*Виноградов*. История Румынии. С. 197.

75　この憲法は立憲主義憲法の範とされるベルギー憲法（1831年公布）を下敷きとしている。ルーマニア国籍の取得の資格をキリスト教徒に限定し、ムスリムとユダヤ教徒を排除したが、1879年にユダヤ教徒に条件付の国籍取得を認めた。木村真「ナショナリズムの展開と第一次世界大戦」柴宜弘編『新版世界各国史18 バルカン史』第5章、山川出版社、1998年、221-222頁。ルーマニアの外国人やユダヤ人問題については、Frederick Kellogg, *The Road to Romanian Independence* (West Lafayette, Indiana: Purdue University Press, 1995), pp. 39-61. またマディエフスキーはルーマニアが憲法制定後も外国人に対して不寛容でしばしばポグロムが起こったと指摘している。*Мадиевский С.А.* Политическая система Румынии: последняя треть XIX - начало XX в. Состояние прав и свобод. Москва, 1984. С. 144. 10年後の1876年、アブデュルハミト2世下のオスマン帝国で公布された「ミドハド憲法」も同様にベルギーやフランスの憲法を参考にしたもの。永田雄三「オスマン帝国の改革」永田雄三編『新版世界各国史9 西アジアⅡ イラン・トルコ』第6章、山川出版社、2002年、304頁。

76　註45参照。

77　現在のルーマニアやモルドヴァ共和国のルーマニア人史家たちはこの露土戦争を「ロシア・ルーマニア・オスマン戦争」と呼び、ルーマニアの援助がなければロシアはオスマン帝国に敗北していたとしてルーマニアの役割を強調し、ルーマニアの独立が列強に与えられたものではなく自ら勝ち取ったものだとする認識を示す傾向がある。*Драгнев и др.* История румын. С. 185-186; Ion Varta, “Rusia şi chestiunea Basarabeană în perioada războiului Ruso-Româno-Turc (1877-1878),” *Revistă de istorie a Moldovei* 3 (1992), pp. 3-15; Vasile Pascu, *Atlas istoric*, Bucureşti, 2002, p. 36.

することすら辞さなかったのだった。そして分離派もまた、統一を回避するために本来であればルーマニア人にとって共通の敵であるはずのオスマン帝国やオーストリアやロシアに接近した。またヤシ事件が残した爪痕は、ヤシ市民に「ツァラ・ロムネアスカからの解放」を叫ばせたほど深刻であった。そして力関係に差があるモルドヴァとツァラ・ロムネアスカにとって統一が意味するところのものが違っていたことは、モルドヴァとツァラ・ロムネアスカの地域的相違として認識しなければならない問題なのである。

たしかにモルドヴァとツァラ・ロムネアスカは統一ののち二度と分離することはなかった。周知のとおり、1881 年から王国となったルーマニアは二つの大戦を経ることでトランシルヴァニアなどのハプスブルク領をその版図に加え、現在のルーマニアに至る。そしてヤシの分離派もまた、列強の支援を受けてでもブクレシュティの政権を打倒してツァラ・ロムネアスカと決別し、モルドヴァを自立に導くだけの政治勢力となることはついになかった。それでも、統一派と分離派の間には外国から君主を招かなければ両公国の統一が望めないほどの深い溝が横たわっていたこと、そしてカロル 1 世が即位したブクレシュティで「単一不可分のルーマニア万歳」と歓呼されていたときヤシでは「モルドヴァ万歳」と叫んでいた人々がいたという事実は、決して無視されてはならない。統一を望んだ人もいれば望まなかった人もいた。現在の「ルーマニア人の歴史」に欠けているのは、このような当然の事実をありのままに見つめることのできる眼なのである。

今後「ルーマニア人の歴史」にとって、ルーマニア人の一体性や連帯を誇張する傾向を克服することが最も重要な課題となってくるだろう。クザのもとで合併しルーマニアとなったドナウ二公国さえ分裂の危機を内部にはらんでいたとすれば、トランシルヴァニアなどハプスブルクの統治下にあった諸地域との結束の強さがどの程度であったかは想像に難くない。現にトランシルヴァニア研究においては、1848 年革命期にモルドヴァ、ツァラ・ロムネアスカ、トランシルヴァニアのルーマニア人の連帯性を強調する傾向は見られない[(78)]。また最近ブクレシュティの歴史家ルチアン・ボイアが著作『ルーマニア人意識における歴史と神話』において、歴史教科書における 1848 年革命の記述が地域差を無視しルーマニア人をあまりに均質化していると批判するなど、「民族統合」論のフィクション性を指摘した[(79)]。それに対して前述のキシナウ出版の『ルーマニア人の歴史』は彼の説を紹介し、それが歴史的事実性を伴わない誤った視点だとしている[(80)]。しかしルーマニア人史家同士でこのような議論がさらに深められるならば、ルーマニア人の一体性神話が崩れ、より真実に近いルーマニア人の姿が描かれる日がそう遠くない将来に訪れると期待することができるだろう。「民族統合はルーマニア人の総意ではなかった」とルーマニア人自身が主張することでしか、「ルーマニア人の歴史」を変革することはできないのである。

---

78 Mario Ruffini, *Istoria românilor din Transilvania* (Bucureşti, 1993); Mircea Păcurariu, *Revoluția românească din Transilvania și Banat în anii 1848-1849* (Sibiu, 1995); V. Russu, *Transilvania în istoria modernă I: revoluția natională a românilor din Transilvania 1848-1849* (Iaşi, 1999).

79 Lucian Boia, *Istorie și mit în conștiința românească* (Bucureşti, 1997), pp. 161-162. 他の主要な研究は *Jocul cu trecutul: Istoria între adevăr și ficțiune* (Bucureşti, 1998); *Două secole de mitologie națională* (Bucureşti, 1999).

80 *Драгнев и др*. История румын. С. 165.